

# 悪について

—「わるい」から「悪」へ—

鈴木 幹 雄

悪に苦しむ者にとって、悪が何であるかは改めて問うまでもない自明のことである。問題はむしろ、悪に苦しめられるのが何故自分なのか、どうしたらその苦しみから逃がれるのか、という点にある。だがそれらの問いに答えるためには改めて、悪とは何かを問わなくてはならないのである。

しかし、悪とは何かという問いはきわめて漠然としている。いったい私たちはこの問いにどこから着手したらよいのだろうか。悪の本質を究明するには、取りあえず悪の現象が手掛りになるかもしれない。悪いもの・悪いことから悪そのものへと反省を進めていくのである。だがこの反省は私たちをどこに導いていくのだろうか。悪とは個々の悪

いもの・悪いことを悪いものたらしめている、それらに共通のある本質であるとするならば、反省は抽象化の道であろう。もし、悪いもの・悪いことを生じさせている原因が悪であるならば、反省は結果から原因へ進む発見の道であるといえよう。では、悪は悪の現象の本質なのか原因なのか。それは予断を許さない問題である。この問題に対して、悪の現象は諸科学の対象であり、悪の本質は宗教と形而上学の課題であるといって、問題を学問の諸領域に分割しても解決には近づかないだろう。そういった手続きは、例えば形而上学が悪（の問題）をどのように論じるかを示してくれるだろうが、その形而上学の悪論が「悪とは何か」という問題全体の何を明らかにしているのかについては何も

示しはしないだろう。悪と悪の現象を分離し、悪をもっぱら形而上学の課題とする手続きは、悪と悪の現象との関係についての予断を含み、悪の問題を形而上学のなかに閉じ込めてしまう。ところで私たちが日常的に意識するのは悪の現象なのだから、悪をその現象から分離して論じようとする形而上学は常識との通路を自から閉ざしてしまってもいいわけである。この通路を形而上学から常識へと歩むことは差しあたってはできない。ここでは逆に悪の現象から悪へ、常識から形而上学への定かでない道を探るだけである。

## —

悪について考えるための手掛りは、悪という語ないしその語によって指示される対象である。だが悪という語の指示する対象は少しも明確ではない。問題はそこにある。

問題を言語の次元に限ってみれば、悪という字はアクとも訓むし、ワル(い)とも訓む。アクもワル(い)も同じ意味を表わすから、それらは同一の字で表記されたわけである。悪人を「アクニン」と訓んでも「ワルいヒト」と訓んでも意味に変りはない。悪口は「アッコウ」とも「ワルクチ」とも訓むが意味は同じである。

だが悪という字で示されていて、アクとワル(い)には慣用上の違いがあることも無視するわけにはいかない。悪筆、悪運の悪はアクと訓まれ、それをワルい筆、ワルい運と訓みかえることはできない。逆に悪賢さ、悪酔いの悪はアクではなくワルと訓むことになっている。だからアクとワル(い)はまったく同じ意味だというわけではなく、異なった由来をもち、慣用上の違いに従って異なった語感を生みだしている。二つのことばは一つの字で示されるほど意味が重なり合っているが、具体的には異った意味で用いられているのである。

悪とワル(い)との差異は名詞と形容詞との差異ともいえない。形容詞ワルいに対応する名詞はワル、またはワルさであって、悪ではない。では悪とワル・ワルさとは同じ意味であろうか。ワル、ワルさは「あいつはワルだ」「あのワルがまた何かしてかしたな」とか「子供がわるさをして困る」というように、かなり独特の意味で用いられるのであって、それらを悪という語にかえようとすれば、私たちの語感その代用にかなり抵抗するだろう。というのも、ワル・ワルさには抽象化による軽さが感じられるが、悪という語には実体としての重みを感じられるから。ここで、ワルという語感の軽さを指摘したが、それは単なる抽象性

の印象ではない。ワルという語は単に対象のワルさを一般的に指示しているのでなく、一つの対象(人ないし動物)に具現しているワルさをその個別的な具体において示し、しかも、そのワルさがあまりにもはなはだしいために、対象の他の諸性質を覆い隠し、対象の実体性を吸収してしまっているといった事態を表示するように思われる。だから、ワルという語は悪い奴を直截鮮明に言い表わしているのである。しかしそこには、いたずら好きの子供をとぎとして「このワル奴」といって笑いながらたしなめることを許すような軽さもある。そしてワルさという語は抽象名詞としての抽象性を感じさせ、悪いいたずらを意味していて深刻さを感じさせないのである。

これに対して、悪はそれに対応する形容詞をもたない、それはワルいから抽象されたものではなく、したがって具体的なものに根差すことなく、それだけで不透明に凝固してしまった実体を意味するように思われる。それは悪人、悪運、悪霊などのように他のものと結びつくが、形容詞のようにそのものの性質状態を指示するためでなく、悪という不吉な邪悪な力と人や運や霊などの合体を示しているかのようなのである。だからこそ悪という語はかつて接頭語として「悪源太」「悪左大臣殿」などのように人の名に冠し

て用いられたのであろう。悪という語はそれが指示する対象の実体性を感じさせるのである。勿論、語感という曖昧な印象にもとづいて悪とワルいの意味の違いを殊更に言い立てるのは控えるべきであらう。それにしても私たちが悪とワルいを慣用的に区別し、その区別を感じとっているということは注目していいだろう。同じことは英語においてもいえるのであって、evilとbadとの同異は悪とワルいの同異に対応しているように思われる。英語においてもevilは形而上学で論じられ、日常的には次第に用いられなくなり、言語分析に専心する最近の倫理学ではevilではなくbadが取り上げられる傾向が見られる。このように二つの語が区別されるということは、それによって指示される対象に違いがあるということである。この違いに理論上どれだけの意味があるか、それは検討に値する問題であるだろう。

## 二

「悪」と「わるい」の語感の差異は慣用に由来するし、慣用はまたその語感に支えられてもいる。しかし語の意味を考えるときに、語感という主観的印象にこだわることは控えるべきかもしれない。いま、語の意味とは何かという

問題に着手する余裕はないが、少なくともこう考えておくことはできるだろう。語の意味とは語が指示する対象ではなく、語によって示される観念が示すものであると。木<sup>\*</sup>という語は私がいま見ているこの木を直接指示しているのではなく、木の観念を指示している。この木の観念は、日本語では木<sup>\*</sup>という語で指示されるが、英語の *tree*、ドイツ語の *Baum* という語によっても指示されるわけである。同じように、「わるい」という語によって示される観念は、英語の *bad*、ドイツ語の *böse*、フランス語の *mal* などによっても同じように表現されている。してみると「わるい」という観念が「悪」という文字ないし「アク」という語によって示されていると考えても何の差しつかえもないわけである。

しかし同一の言語に属する二つの語が同じ観念を指示するのであれば、なぜその二語は互いに区別されるのであろうか。私たちが二語を区別している限り、その区別の事由を明らかにしなくてはならない。そのためにはその観念の示すものに目を向ける必要があるだろう。

では、「わるい」という観念は何を指示するのだろうか。それはまず、病気や事故などのわるいこと、また、わるい人やわるい料理などのわるいものを指すのではない。「わ

るい」はもの・ことそのものを指すのではなく、もの・ことの性質状態を示すのである。だがその性質は色や音などの感覚によって知られる性質ではない。それらについても「よい・わるい」がいわれるのだから。あるいは、「都合がわるい」「ばつがわるい」「体の具合がわるい」などといわれるのだから、状況や事態が示されているでもない。「わるい」という観念は意識の対象でありながら、その観念に対応する経験の対象は見当らないのである。「赤い」という語は「赤」という観念を示し、その観念は、この本の表紙の赤やこのバラの花の赤のように、知覚されたある性質を指示しているが、「わるい」という観念はそのような指示対象をもたない。その意味でそれは空疎な観念である。

では、空疎な観念を指す語は意味がないのだろうか。もし語の意味が、観念と意識の対象との間の一対一の対応ということならば、「わるい」という観念はそれに対応する対象をもたないのだから、その語は意味がない、それは何も意味しないといわなくてはならない。しかし実際には私たちは「気分がわるい」「日当りがわるい」という言葉を理解しているのだから、「わるい」という語は意味がある。すると、「わるい」という観念はそれ自体で明証的で、意識の対象となる経験的事実への参照なしに、充実した内容をもつ

のだ、と考えるべきなのだろうか。G・E・ムーアは影響力の大きかったその著『倫理学原理』で、「もし私が『よいとは何か』と訊かれたら、よいはよいだというのが私の答えである、それではそれは終りだ」(六節)と述べ、それ以外に答えようがないことを論じている。このムーアの断定にならって、「わるいはいわるいだ」というべきであろうか。そうすると私たちは「わるい」という観念を実体とみなすことになるか、あるいは同語反復に陥ってしまうことになる。このような帰結を避けるためには、語は一对一の対応で一つの事実を指示する、という考えを吟味し直す必要があるのではないか。

いうまでもなく、「わるい」という語も様々の意味を表わす。例えば時枝誠記編『例解国語辞典』では「わるい」の語義が次のように分析・分類されている。(用例を略す)

- ①人間として行うべき道になっていない。道徳上よくない。邪悪である。②品質や状態が劣っている。③正常な状態でない。また働き・機能が十分でない。④人間にとって困る、都合がよくない。迷惑・有害である。⑤人に迷惑をかけて気の毒である。済まない。⑦人間によい感じを与えない。

「わるい」という語は時に応じてこれらの事態のどれかを

表示するわけである。だが問題は、これらの異なった事態、他の語によって表示される事態が「わるい」という一語で表示されるのは何によるのか、という点にある。そして一応、それはそれらの事態が「わるい」という観念によって示される特質を共有しているからだ、といえるだろう。その特質とは何か。それは意識に不快感・嫌悪感を惹きおこす、好ましからざる(対象の)状態である。つまり「わるい」ということは不快感・嫌悪感の故に忌避されるということなのである。

だがそのことから、「わるい」という語が話し手の感情(不快・嫌悪)や意向を表現しているという結論をひき出すことはできないだろう。「コーヒーはわるい飲み物だ」という言葉は「私はコーヒーが嫌いだ」ということを表現しているだろうか。「わるい」という語が何らかの事実を指示しなければならぬのに、実際には何も指示せず、ただ話し手の「嫌いだ」という感情に対応しているだけだからといって、その語がその感情を表現するということはできない。その感情は「嫌い」という語によって指示されているからである。その上、「コーヒーはわるい飲み物だが、私は好きだ」ということもあるのだから「わるい」という語が「嫌い」という感情をいつも表現するとはかぎらない。好き嫌

いは特定のものに対する個人の特殊な傾向性であり、「よい・わるい」は一般的な評価である。「コーヒーは好き(嫌い)だ」という言葉は私の好みという一つの事実を述べているだけであるが、「コーヒーがわるい飲み物である」かどうかは論議の対象になる。そのことから「わるい」という語が「嫌い」という事実を表現しているとはいえないのである。ではそれが話し手の何らかの意向を表現しているとは言えないか。「コーヒーは胃にわるいよ」という言葉は、「だから飲むな」(禁止)、「だから飲まない方がいい」(勧告)という意向を言外に表現しているのだから。だがそのような意向は別の言葉(「このコーヒーはまずいよ」)によっても表現されるのだから、「わるい」という語と特定の意向との間に必然的な結合があるとはいえない。視点をかえれば、「わるい」という語はたしかに話し手の意向を相手に対して表現し伝達するが、まさにその故に「わるい」ものを表現しているのではなく、対象を指示することによって意向を表現している。しかもこの表現が成立するためには、「わるい」という語が相手の注意に値いする事態を示しているのではなくてはならない。結局、倫理学上のいわゆる表現説・指令説はムーアの「よいはよいだ」という同語反復を克服しようとして、語を心的事実(感情や意向)を伝え

る記号とみなし、その記号の伝達内容を読み取ろうとしたのである。しかし語が記号として機能するためには、すでにそれが特定の対象を指示することが前提とされるのであって、表現説はコミュニケーションを可能とする語の意味を暗黙の前提としながら、それを見捨てているのである。そしてその誤りは、語が個別的な心的対象に一对一の関係で対応している、という考えに由来しているように思われる。だが私たちはそのような言語観を取り敢えず捨ててみなくてはならない。

### 三

「天気がわるい」というとき、私たちはその「わるい」という語で何を示しているのか。それはさしあたり天気の状態であるが、客観的に知覚しうる事実を指しているわけではない。雨が降っているにしても、曇りであっても、風が吹いて肌寒くても、「天気がわるい」といわれるだろう。どのような天候状態であっても、それが好ましくない、厭な天気であれば、わるい天気なのである。ところで、「厭な」というのは天気の状態ではなく、天気に対する主体の態度、それを厭い、それを忌避しようとする傾向にある態度を示している。だから、「厭な天気」とは、対象を避け

ようとする態度で嫌悪感を通して意識された天気であり、主体は対象を意識するとともに自己の気分をも対象化して、それを天気の性質として意識している。では主体はなぜ対象を避けようとするのか。実は、主体が避けようとしているのは対象ではなく、なによりもまず自己の不快感態であり、その状態への厭な気分であり、そしてその気分と結びついた対象なのである。いうまでもなく人間もまた、他の生体と同じように、快感を持続しようとし、不快・苦しみを避けようとする傾向性をもっている。この傾向性の意識が好き嫌いの感情である。勿論、傾向性がそれとして意識されるためには、一つの対象が与えられ、その対象によって主体の傾向性が方向づけられなくてはならない。それどころか、意識はつねに何ものかについての意識だ、という現象学の主張に従えば、意識は何らかの対象を意識することによって、自己の快・不快という感受的状态を意識するのである。だからこの状態は単に意識の内的状態なのではない。意識はこの状態においてすべてを経験するのだから、この状態は主体の状況そのものである。前述の例でいえば、「厭な天気」というのは不快な状況全体であり、厭な状況全体であり、その状況全体が天気に収束されて対象化されたのである。

だが「厭な天気」はそのままで「わるい天気」ではない。前者はまだ傾向性に支配された意識の対象、状況を厭う意識にとつての対象である。意識がこの状況を反省し、対象とともに自己自身をも意識するとき、「厭な天気」はその原初的な結合を切断されて主体の感情と対象としての天気とに両極化してゆく。「厭な天気」はもはや一つの状況ではなく、反省的意識の前にある、主体の気分と天気という二つの対象の関係である。そしてこのような関係において、天気は「わるい」といわれるのである。したがって、天気が「わるい」のは主体の意識にとつてであるが、それと同時に、「それは主体の気分にとつても「わるい」のである。つまり「わるい」は対象相互の関係においてもいえるのである。ついで、「たばこは身体にわるい」「子供にはわるい映画」などといわれる。この言葉に示されているように、「わるい」という語はたばこ身体、映画と子供の「有害な」「忌避すべき」関係を示すだけで、感情的要素を除外している。それは、「わるい」ということの意識がそれだけ主体の感受的状态や傾向性から反省的に身を離していることを意味するのである。しかしだからといって意識が対象に対して無関心になったわけではない。対象について、それは「わるい」というとき、意識はもう一度対象への忌避的態度をとつて

いるのであり、それも傾向性に直接規定されてそうするのではなく、意識一般の立場で傾向性の規定を受けられているのである。いいかえると、主体は反省を介して傾向性を基準として対象を忌避すべきものと評価したのである。だから「厭な」から「わるい」への移行は意識の反省による特殊から一般への転換だといえるだろう。

それ故、「わるい」という評価の根底にはつねに対象への嫌悪という傾向性の作用がある。勿論それは直接に意識されるわけではなく、意識の反省に余韻のように反響しているにすぎないにしても、それなしには「よい・わるい」の判断はできないだろう。私たちがしばしば「わるくない」「よくない」という語で評価したり、どちらとも判断できないのは傾向性の促がしがないからである。しかし、「よい」という語は様々な意味でよく用いられるが、「わるい」という語は、その反対語でありながら、それほどには用いられない。「いいペンだ」とはいうが、「わるいペンだ」というよりも「書きづらいペンだ」という方が自然だろう。「よい絵」に対しては「わるい絵」でなく「へたな絵」や「厭な絵」といわれる場合が多いように思われる。どうやら対象が私たちに不快を感じさせるとき、意識はその状況全体を対象化することがむずかしいようである。むしろ意

識はその不快な状況のなかで、その不快の原因を、何がわるいかを見つけたそうとするだろう。特にその状況をすぐ変化させることができず、私たちが不快感に苦しめられるときには、何が、何故私たちを苦しめるのかという問いが私たちをとらえるだろう。

#### 四

私たちはたいいていある対象についてその「よい・わるい」を問題にする。しかし私たちが苦しみ、私たちを苦しめるものをわるいものとして探す場合、わるいものがあらかじめ与えられているわけではない。意識に与えられているのはなによりもまず苦しみである。この苦しみの状態において意識は受動的であり、この受動性を通して、能動的な何ものかが自己を苦しめていると感ずる。意識がこの状態を反省し、対象化するためには、この能動的な何ものかが意識されなくてはならない。たいいていの場合、苦しみの原因が意識されるから、それによって苦しみも対象化される。それは充たされない欲求、身体の一部の痛み、自分に向けられた敵意かも知れない。もしその原因が病気や怪我、偶然的事故による損失などであれば、それは自然的過程であり、苦しみは単なる痛みに局限され、耐えるほかないもの



となる。それが敵意の場合であれば、主体はそれに反発し、嫌悪感や怒りや恐怖という感情などに变化するだろう。だが苦しみの原因が特定できないとき、意識は苦しみをもちたらしめるのを、自己の受苦において意識する。それは「もの」としか呼べないものであり(古代の人たちは、それをもの、の怪といった)、私たちを苦しめる実体として悪と呼ばれるものなのである。

そうだとすると、悪は形容詞「わるい」の抽象名詞とみなすわけにはゆかないだろう。「わるい」はある特定の対象の、忌避すべきものと評価された、性質であり、意識によってその対象の性質として対象化されているにすぎない。それに対して、自分を苦しめるものが特定されえず、あるいは苦しみが激しくてその原因を対象化しえないとき、意識はその受苦において自己を苦しめるものを、具体的なある対象に特定しえない何ものかとして経験するのである。もちろん、この苦しみをもちたらしめるものが悪と呼ばれるようになるには道徳的三元論に立つ世界観の成立を待たな

くてはならなかった。その解明は別の課題であるが、それにしても道徳的世界観を受け容れ、それによって解釈された経験そのものは、受苦において主体を苦しめる何ものかであり、それが悪という外来語によって示されたと考えられるのである。

私たちが悪という語で指示するものは、私たちを苦しめる力であり、熱に浮かされたときの悪夢のように、苦しむ者の想像力を刺激して様々のイメージを喚起する。それは神話的形象の源泉であるといえるだろう。悪とはその合理化された観念なのである。それは苦しみをもちたらしめるから、わるいものであるが、どのような対象にも結びつかないからその限り対象化されず、実体視された。してみると悪とは、苦しみをもちたらしめるものを反省して対象化する、意識の対象化の残余だといえる。それ故、この悪を明らかにするには、苦しみの経験の反省によって対象化しえないものに接近しなくてはならないだろう。